野田の金融と商業

（のだのきんゆうとしょうぎょう）

旧野田商誘銀行（現株式会社千秋社）
建物現況 大正 15 年建築 平成 19 年撮影

この写真は、市内野田下町に現存する旧野田商誘銀行本店（現株式会社千秋社社屋）です。大正 15 年(1926)に建てられた、当時流行のアール・デコ様式による大変モダンな建物です。「商誘(しょうゆう)」という耳慣れない用語を使った行名は、銀行の設立発起人のほとんどが醤油醸造家（茂木・高梨一族）であったことから、「醤油」にちなんで付けられたものでした。

明治 33 年(1900)に醤油醸造家たちの機関銀行として、資本金 25 万円で設立された野田商誘銀行は、関東大震災後の大正 13 年(1924)には資本金を 300 万円に増資し、満州事変が起こった昭和 6 年(1931)の預金額は 1200 万円に達するように、県下でも有数の規模の銀行へと成長します。同行はまた、創立後 5 年間は株主配当を行わず、社内留保の充実に努めるなど、堅実経営でも知られていました。

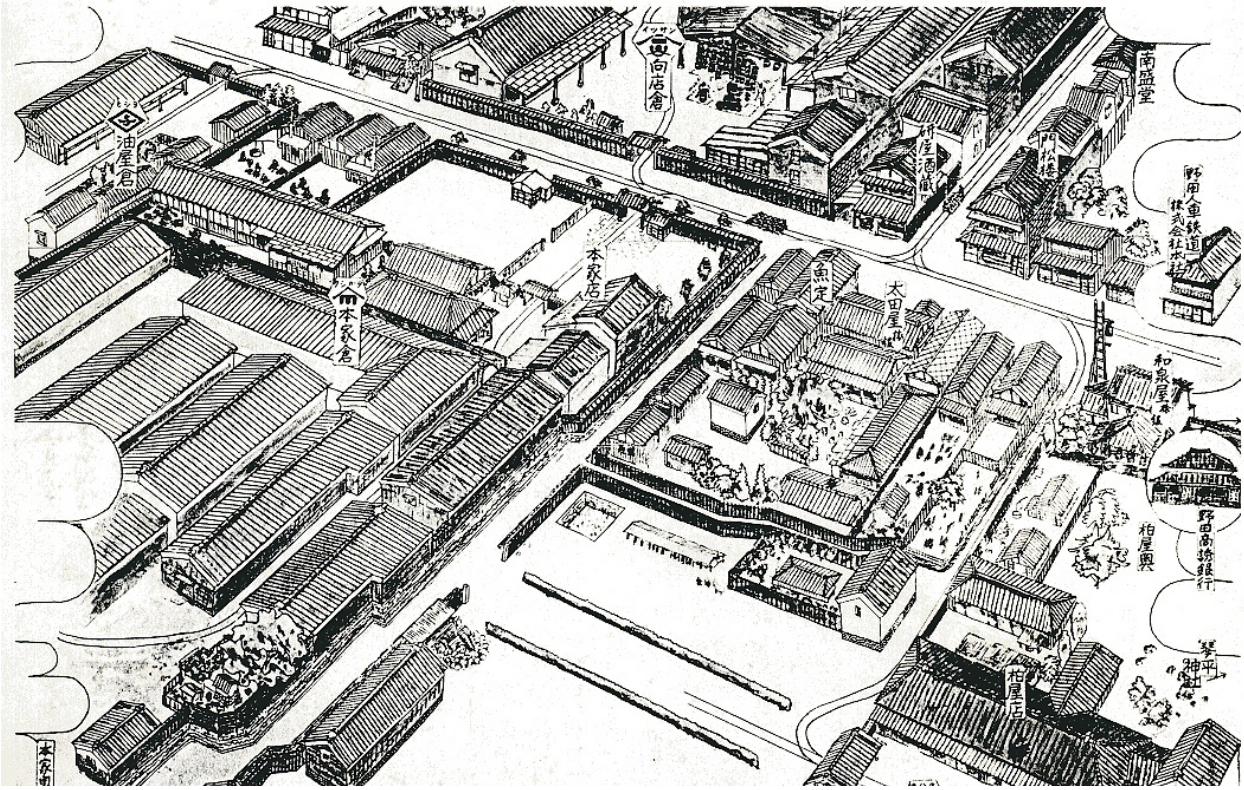
同行は、太平洋戦争末期の昭和 19 年(1944)に、大蔵省の銀行合同政策に従い、その前年に設立された千葉銀行に営業を譲渡して銀行業を廃業します。これにより、県内に本店を持つ銀行は千葉銀行のみとなりました。その後この建物は、千葉銀行野田支店として昭和 44 年(1969)まで使われました。

商誘銀行のある下町の様子を描いた鳥瞰図に、「太田屋」という屋号の入った建物が見えます。太田屋は中村熊次郎商店とも称し、明治から大正時代にかけて旅館を営業する一方で石炭の販売を行い、大正 6 年(1917)頃からは肥料の取扱いも開始して、野田町外にも広い商圏を持つ石炭・肥料商へと成長します。

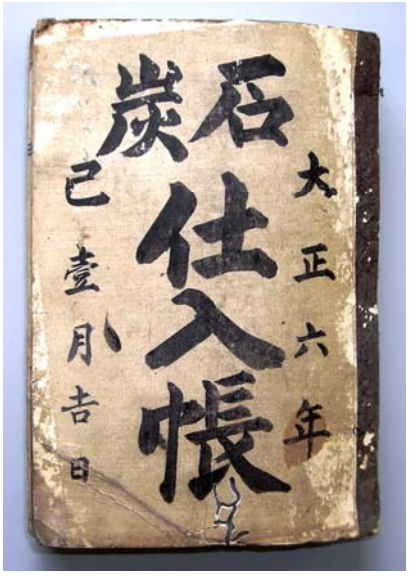
大正 6 年の石炭仕入帳を見てみると、常磐炭鉱などから産出された石炭を、古河合名会社・入山採炭株式会社といった採掘会社から数トン単位で仕入れ、野田醤油株式会社をはじめとする町内の醤油醸造工場や、松戸・布鎌(栄町)・取手・守谷・水海道・粕壁(春日部)・新座・久喜・栗橋・前橋などの各地へ販売していました。肥料についても、大日本人造肥料株式会社や函館・秋田・埼玉・下関の肥料商などから、魚肥(ぎょひ)・米糠(こめぬか)・大豆粕・過燐酸石灰(かりんさんせっかい)・硫安(りゅうあん)といった各種肥料を購入して、周辺農村へ販売しています。

中村商店は現在、石炭・肥料の販売を行っていませんが、商家建築の店舗は現存し、かつての店内には取扱肥料の看板が残されており、その商売ぶりをうかがうことができます。

明治末期の野田町下町を描いた鳥瞰図　茂木勇右衛門氏画　（茂木勇右衛門家所蔵）



中村熊次郎商店の「石炭仕入帳」　（大正６年　中村幸雄氏所蔵）



中村熊次郎商店の名前が入った大日本人造肥料株式会社製肥料の看板
（昭和戦前期　中村幸雄氏所蔵）